

第2回 アロエ

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

アロエは南アフリカ原産のユリ科の多肉植物である。近年は葉の内部のゼリー状の部分が食用とされるからイメージしやすいかと思う。生の葉をとってみると断面に肉厚のゼリーが見え、すぐに黄色がかった透明の粘液がしみだしてくる。この葉汁に薬用成分が含まれており、口にするとひどく苦いため、「アロエゼリー」のつもりで生の葉をかじるととんでもない目にあう。この液汁を集めて乾燥させると黒～褐色の塊となり（写真右）、これを生薬として用いる。

アロエを薬用とするのはヨーロッパの伝統医学の方が先で、1世紀ごろ著された薬物書である『ディオスコリデス薬物誌』には、下剤や健胃薬として内服し、あるいは傷やおできなどに外用して用いると記されている。ヨーロッパの医学では異常な体液を排除することが目標になることがあるので、粘液状の生



キダチアロエの花



アロエの生薬名は「蘆薈」。ふつう、「ロカイ」と読むが、「ロエ」と読むこともある。あるいは呉音で読むと「ルエ」。アロエを音訳したと考えられている。

葉であるアロエは体液に近い性状を持つとして非常に重視された。

アロエが中国に入ってきたのは、やや遅れて唐末から宋代にかけてで、日本にもほどなく伝えられたと考えられる。下剤としての利用のほか、清熱薬、小児の疳の虫の薬としても用いられている。これは、東洋医学では「苦」味は「寒」の性質を持ち、小児の疳には「虫下し」として下剤が用いられることによるため、アロエの利用法に東洋医学的な解釈が加わったと考えられる。また、東洋医学では、処方煎じ薬として調製するのが一般的であるが、アロエを含む処方丸薬の形をとることが多い。おそらくは、アロエには粘液が含まれるため、生薬をまとめて丸薬の形に製するのに適していたのであろう。

明治に入り、我が国で医学・薬学が近代化のきざしを見せてからもアロエは重要な生薬であった。日本薬局方には明治19年に公布された初版から収載されている。ただし、ここでは当時のヨーロッパ医学をもとに、もっぱら下剤として用いられている。成分研究もおこなわれるようになり、アントラキノン系の誘導体が下剤の薬効を示す主成分であることが明らかになっている。

一方、かつてはアロエを栽培して、民間薬として利用していた家庭がたいそうあった。虫刺されや火傷、切り傷などに、生の葉の皮をむいてゼリー状の部分をおしあてておくと炎症が引き、治りがはやい。アロエには「医者いらず」といった別名もある。アロエについては内服薬に比べて外用薬としての効果を研究した例が少ないと言える。今後の研究によっては、民間薬に見られる利用法が見直される日も来るであろう。

